

# 名家連ニュース

平成 23 年 7 月 20 日 (水)  
発行：特定非営利活動法人  
名古屋市精神障害者家族会連合会  
会長 堀場洋二  
TEL/FAX (052) 411-2890 NO.154 号

中 日 帯 刊 隔 月

平成 23 年 7 月 19 日 (火)

(敬請複製使用許可)

## 重い精神障害 訪問で支える

### 広がる ACT

重症の精神障害者が地域で白分らしく暮らせるよう、精神保健福祉士ら専門職が、24時間体制の訪問サービスで患者を支える「包括型地域生活支援プログラム」(ACT=アクト)が、各地に広がっている。浜松市で取り組む「びあくクリニック」の精神科訪問看護に同行した。(佐橋大)

「書いておくと、お風呂にしましよう」。浜松市内の六十代の男性宅を訪ねた、びあくクリニックの精神保健福祉士、山田剛さん(仮名)が声をかけた。精神保健福祉士は国家資格で、精神障害者の保健・福祉を担う。週一回、クリニックの訪問チームのスタッフが交代で男性宅を訪ね、入浴の介助をしたり、心身の状態を確認したりしている。症状を消すのではなく、その人らしい生活の実現が支援の目標。服薬は、生活しやすくする手段の一つだ。



ACTチームの朝のミーティングでは、精神保健福祉士らが患者の状態などについて情報交換する。浜松市北区のびあくクリニックで

もった。幻覚症状があり、一晩の寝がえりが見え、外出すると無に脚を取られると思っていた。家でも、筆を握り出そうと感傷が散らっていた。訪問チームが関わるようになったのは、同居の高齢の母親が「面倒を見きれない」と相談したのがきっかけ。クリニックの新規院長(仮名)が訪問し、母親の話と本人の様子から統合失調症と診断した。その後、チームが訪問を始めたが、服薬を始めても聞く耳を持たない。会話の糸口もなかなか見つからない。ある時、山田さんが「幻覚は消えないが、外部の人を受け入れ、配食サービスやヘルパーの派遣などで一人暮らしができていく感も出てきた」と話した。

## 24時間対応 信頼築き症状改善

訪問チームは精神保健福祉士4人のほか、医師一人、作業療法士一人、外部のステーションの所属も含め看護師七人、ボランティアも関わる。「多くの人が関わる方が、患者と関係を持つためのアイデアが増える。負担を分かち合う責任でもあり」と新規院長、患者や家族の不安に応えるため、夜間も精神保健福祉士に相談電話が掛かる。チームが訪問する患者は五十六人、大半が重い統合失調症。妄想で外出できず、受診できなかつた人、入院後、病院嫌になつて治療を中断し、症状のせいで家族とのあつれきを重なる人。困り果てた家族が偶然、初診でも訪問する同クリニックを知り、相談することが多い。

回復し、仕事に就いた人もいる。三十代の男性は四年前の訪問で、初めて統合失調症と診断された。「誰かに殺される」と妄想におびえ、外出しづらくなつた。病気が癒えがまじまじと、文字の意味が分からない。「もうおしまいた」と自分を責めた。しばらくは、妄想に支配され、訪問を受けることが億劫がぬえなかった。やがて親身に接する精神保健福祉士(仮名)に接するうちに、服薬、同伴での散歩とステップアップ。次に男性は、プールに行くことを希望した。精神保健福祉士の同伴でプールに通え、社会で生活する自信を徐々に取り戻していった。今も病気が癒えつつあるが、薬を飲むと嘔吐している。「まず、病院に来て」といふところばかりだったから、今は十二あり、中部地方では、野良山病院の「関係づくりを重視する二十四時間体制の訪問」がある。名古屋市の愛知立城山病院も、通院患者の支援のため、ACTの導入を目指している。

つなごう医療 80 中部の最前線

新居先生は、昨年秋の「甲州・東海ブロック研修会」で「ACT」の講演をして頂きました。

昨年5月「こころの健康政策構想会議」の提言と緊急署名を受け、厚労省に「検討チーム」が設置されました。6月17日には「訪問支援(アトリチ)本格導入」が合意され、予算化(7億円、25か所)されました。本年7月6日には「4大疾病」に精神疾患を加えて「5大疾病」として、重点的に対策を進めていくことを決めました。

100万人署名等、私たちの運動は確実に実を結びつつあります。

諦めることなく、希望を持って前へ進んでいきましょう！  
被災地の皆さんと共に「なでしこザッパ」のように！！